

シンポジウム

読むこと／詠むことの漸進的螺旋

— 非・日本語による俳句の展開 —

To Read / to Compose Haiku: the Gradual Helix

— Development of Non-Japanese Haiku

キムラ トシオ
木村 聡雄

1. [序論として]

シンポジウム開始に際して司会の深沢眞二氏から、前 EU 大統領（欧州理事会議長）ヘルマン・ファン・ロンパイ氏^①が俳句に深い理解を示しているという状況が今回のシンポジウム企画の発端のひとつでもあった、との話があった。ファン・ロンパイ前大統領とは私自身、俳句を通じて直接関わりがあるので、ここで序論として一言述べておきたい。

ファン・ロンパイ氏は俳人として、母国語であるベルギーのオランダ語（フラマン語）に英仏語訳などを加えた多言語版個人句集を二冊出版している。私が最初に前大統領に会ったのは2014年、EU 本部のあるベルギーのブリュッセルで大統領の俳句講演^②の司会を担当したときであった。続いて2015年6月、任期満了後のファン・ロンパイ氏が来日し、麻布のEU 代表部（EU 大使館）で俳句シンポジウム^③が開催されたときも、再び私は司会を担当する機会に恵まれた。このときファン・ロンパイ氏は、滞在中に詠んだ新作英語俳句3句を披露しているので、そのひとつを示しておく。

山々の森明暗に俳句満つ^④ ヘルマン・ファン・ロンパイ（木村聡雄訳）

ところで、前大統領は来日中に、岸田文雄外相から日本の正式な俳句大使に任命された。叙任式は外務省の飯倉公館で行われ私も出席したが、ファン・ロンパイ氏は俳句をさらに世界へ広める任務に就いたのである。冒頭で述べたように、元大統領の俳句への情熱がわれわれのシンポジウムの企画にも影響を与えたとすれば、俳句大使としての任務は、着実に遂行されつつあると考えられるのではないだろうか。

1. A [非・日本語俳句への新たな視点]

21世紀、俳句は日本固有の伝統詩形から大きく羽ばたき、世界の多くの国々においてそれぞれの母国語によって詠まれている。このシンポジウムで私は、非・日本語による俳句の世界的広がりについて概観し考察しようと思う。その方法として、二つの観点が求められるであろう。すなわち、発展の歴史的認識と、現状分析である。どのようにしてこうした非・日本語俳句興隆に至ったのかという歴史的視点に関しては、これまで、例えば明治期の俳句翻訳の研究とか、あるいは特定の時代の海外での俳句状況を記述するような断片的研究は見受けられた。しかしながら、歴史の全体像をその精神的背景とともに把握しようとする通史的試みはなかったように思われる。そこで今回、新たな歴史的観点からこのテーマにひとつの方向性を示せればと思う。現状把握のためには、後半で今日の世界における非・日本語俳句の広がりについて実例を挙げながら検証したい。

1. B [非・日本語俳句の分類]

非・日本語俳句^⑤とは文字通り日本語によらない俳句作品であるが、本論ではこれを大きく二つに分けて考えることにする。ひとつは芭蕉などの古典から現代俳句や個人の俳句まで、もとは日本語で詠まれた俳句を別の言語に翻訳した俳句作品である。もうひとつは、俳句という詩形式を標榜してはいるものの、最初から日本語以外で詠まれた「外国語の詩の一種」としての俳句作品である。

本論ではこの二種類の非・日本語俳句について扱うが、中心はもちろん二番目に挙げた外国語による俳句となる。

1. C 〔非・日本語俳句の漸進的螺旋〕

俳句が世界中で受け入れられている現状は近年突然に起こったことではない。その進展の全体像に関しては前述の通りこれまで論じられることが少なかったが、筆者の考えでは、今日のこうした状況に至るまでにはいくつかの「漸進的」段階を経る必要があったと思われる。その全体像を理解するために歴史的観点から考察を始めたい。

本シンポジウムのテーマは、司会の深沢氏の提案による「日本文学の越境——非・日本語で Haiku を読む／詠む——」だが、今回の問題を考えるには示唆的であろう。というのも、前段で分類した二種類の非・日本語俳句のうち、日本語からの翻訳とは、海外に向けて（規範としての）「読む」べきテキストを作り出すことを意味するものであり、他方、最初から非・日本語による俳句とはすなわち、（規範に倣って）「詠む」ことによって生み出されるものだからである。「非・日本語俳句」の展開においては、私が考えるに、必然的にまず翻訳を通して俳句を「読む」（取り込む）行為があって、その後に続いて「詠む」（表出する）行為へと進んで行くと言えるだろう。さらにそれらの営為が「螺旋」状に繰り返されつつ段階を経ながら、非・日本語俳句という、今ここで論じられている詩形へと生成・発展していったと考えられるのである。

2. A 〔19世紀末（明治期）：翻訳によって俳句を「読む」〕

非・日本語俳句の始まりは、今から100余年前の明治期であった。当時の日本は近代化を急速に進めようと、西欧からそれぞれの分野の専門家たちを招いたが、彼らが西欧に初めて俳句を紹介したのだった^⑥。ところで明治時代後半、とりわけ1890年代といえ、正岡子規の俳句革新運動の時期と重なる。これはすなわち、翻訳による海外への俳句紹介の時期は一般的に想像される以上に早く、

俳諧の連歌の発句が俳句として自立したすぐ後にはすでに欧米に伝えられていたことを意味しているのである。

さて、こうした最初期の発句（俳句）の紹介・翻訳の中でも体系的なものは、W. G. アストンの『日本文学史』^⑦（1898／明治31年）である。アストンはイギリス人外交官で日本語と日本史の研究者でもあった。本書の17世紀の章の中の「俳諧」の項でアストンは、「俳諧（筆者注：ここでは発句のこと）は、短歌から最後の14音節を抜いたもので、それぞれ5-7-5の三つの句からできている^⑧。」と形式の説明から始めている。さらに、「もっと古い詩形」よりも言葉遣いや事柄が素朴で、「短歌（筆者注：和歌）」が否定するような俗な主題も扱うとも論じ、俳諧が貴族のものではなく庶民の詩であり、滑稽さをも含むことを示している。この項では当然芭蕉に関する記述が最も多く、その英訳も数句紹介されている。

三井寺の門たゝかばやけふの月^⑨

芭蕉

アストンは、このような月の美しい夜にこそ三井寺の美しさは映えることだろう、とこの句の鑑賞を付け加えている。非・日本語俳句は、こうして翻訳による（規範としての）「読む」テキストとして生まれたのである。

とはいえ、この時点ではまだ西欧において俳句に対する反応はほとんど見られなかった。こうした俳句紹介も、より大きな視点で捉えれば19世紀後半のジャポニズムの流れの中に置くことができると考えられるだろうが、浮世絵などの視覚的な美が西欧人の心を掴んだのとは対照的であったと言えるだろう。いずれにせよ、多くの人々が興味を示すためにはさらなる段階を経る必要があった。

2. B [20世紀前半（大正期）：非・日本語で俳句を「読む」]

次の段階は大正時代である。アストンから十数年後、エズラ・パウンドが最初にして最大の非・日本語俳句のアイコンとして現れたのである。パウンドが

1913年（大正2年）に、

「地下鉄の駅にて」

〈群衆に顔の出現／濡れた黒き枝に花卉〉^⑩

という俳句的な詩を発表すると、欧米の詩人たちが俳句に興味を示すようになる。この作品は発表当時よりも、俳句が世界的展開を見せる現在のほうがおそらく一層注目され論じられているように思われる。今日では、この詩は俳句なのかといった議論もあるかもしれない。しかしながら、思うに問題はそのことよりもむしろ、それまでは翻訳を通して「読む」ための受動的なテキストとして存在した俳句を、非・日本語（ここでは英語）によって「詠む」という能動の対象へとパウンドが転換せしめた点にあり、さらにその最初の象徴的な詩となったという点にある。日本人以外の最初の俳句アイコンという視点に立てば、今回のパネリストのひとりマイケル・フェスラー氏が論じたように、非・日本語俳句はパウンドから広まったという捉え方は的を射ているだろう^⑪。

パウンドによる非・日本語で俳句を「詠む」ことの影響は今日に至るまで決定的とはいえ、私の考えでは、これはまだ、現在の世界的な非・日本語俳句興隆の直接の要因となったとは言えないように思われる。パウンドの時代、20世紀前半に非・日本語で俳句を詠んでみようとする人は、主にプロフェッショナルな詩人や作家、文化人たちであって、今日の世界的俳句状況、すなわち、海外においても一般的な愛好家や子供たちをも巻き込んだ俳句を「詠む」行為（その状況は、日本と重なるところも見られる）という広がりまでは、さらなる段階を進まなければならないだろう。

2. C [20世紀半ば（昭和期）：俳句「再読」]

海外において俳句への興味が大きく広がったのは、20世紀半ば、第二次大戦後のアメリカにおいてであった。それは、俳句を「読み直す」という螺旋的進

展における再出発でもあった。戦前から日本の学習院大学などで英語を教えていたイギリス人教師 R. H. プライス (R. H. Blyth: 1898-1964) が、1940年代末に古典俳句の英訳を多数含む『俳句』第1巻¹² (1949) [全4巻] を出版したのである。

名月や池をめぐりて夜もすがら¹³

芭蕉

プライスの最大の特徴は、仏教学者の鈴木大拙の影響のもと、俳句そのものを禪的解釈と結びつけたことである。プライスのこの著書には、「俳句とは、禪的観点において理解されるべきである¹⁴」と述べられている。パウンドによって「詠まれる」に至った俳句を、プライスは、おそらく自らはそのような自覚を持つことなく、今一度新たな視点から「読み直した」のである。プライスの著作は戦後アメリカの知識層や若者の間の禅ブーム、東洋志向、さらには、固定観念に反対するヒッピー文化とも響き合って大いに読まれ、ついに、アメリカはここに俳句という詩形を「再発見」することとなった。言うまでもなく、彼の禪的解釈は我が国の大部分の俳句関係者の理解とは異なるであろう¹⁵。パイオニアとしてのプライスの海外での人気は、21世紀になっても相変わらず高いように思われるが、今日では、世界において「俳句＝禅」というような単純化がそのまま語られることは少なくなっていると感じられる。結局、翻訳や解説が他にも現れて日本文学や俳句に対する理解の客観化が以前より進んだと言えるだろう。とはいえ、シンポジウムのテーマ、「日本文学の越境」という視点に立てば、文化の越境とは結局、単に物理的に境界をまたぎ移動することではないことは明白と思われる。必然的に新たな解釈が付加されることになるだろう。特にプライスについては、伝統的解釈をも「越境」することによって、アメリカや世界における俳句の広がりを彼以前には想像さえしえなかった次元にまで引き上げ押し広げたその発信力、影響力を思うとき、我々日本人はそれを曲解だと言うばかりでなく、我が国の幾多の文化導入の歴史的経緯をも思い返

す必要があるのかもしれない^⑯。

2. D [20世紀後半（昭和末期）：英語で俳句を「詠む」]

欧米では100年以上も前から俳句を翻訳で「読んでいた」わけだが、多くの
人々が広く英語で自ら俳句を「詠む」ようになったのは、おもに戦後以降、つ
まり20世紀後半のことと言えるだろう。1950年代、ビート詩人たちは、ブライ
ス流の「読み」にも呼応する形で禅や俳句に傾倒して行き、彼らなりの俳句を
「詠んだ」。

啼かぬ猫ポストのわきで月を知る^⑰ ジャック・ケルアック

（和訳：木村聡雄）

ブライスやビート詩人たちに導かれたかのように、アメリカでの俳句への興
味は一気に高まって行った。プロの詩人たちから始まって次第に一般の愛好家
たちの間へも、英語で俳句を「詠む」行為が広がって行ったのである。その精
神的背景として考えられるものに、古く19世紀半ば以降、欧米知的階級の底流
として存在してきた脱西欧志向があったと言えるのではないだろうか。その流
れのひとつである東洋志向をブライスが俳句／禅を通じて具体的な文学の問題
へと置き換え、さらにはその後ビート詩人たちによる俳句を「詠む」行為の実
践が、当時のビート詩の人気とともに広がって行ったと思われるのである。他
方、広島・長崎の死の灰の中からの日本の奇跡的な復活やソニー、ホンダなど
に代表される高度成長、さらにはベトナム戦争などを通じて、戦後の時代その
ものがアメリカ人の東洋に対する興味・好奇心をさらに掻き立て、それが追い
風となった部分も少なくないと考えられる。やがてアメリカでの俳句人気は確
固たるものとなる。すると「自由詩を書く詩人たちの余技としての俳句形式」
というそれまでの詩的状況のみならず、我が国の俳人たちのように、主に俳句
を専門に「詠む」アメリカ俳句詩人も現れるようになる。1960年代後半には日

本以外では最大の俳句団体であるアメリカ俳句協会[®]も設立されるに至ったのである。

2. E [21世紀（平成初期）：世界が非・日本語俳句を「詠む」]

「読む」／「詠む」ことの漸進的螺旋は実はこれだけでは終わらない。今日では、アメリカに限らず、世界中の国々において母国語で俳句が詠まれている。各国の俳句愛好家が俳句を「読み」そして「詠む」ようになった経緯は、これまでほとんど指摘されてこなかったことだが、私はアメリカでの俳句人気の影響によるところが大きいと考えている。英語による俳句関連の書物（加えて近年ではインターネット上の英語による俳句サイト）が世界中で（新たな規範として）「読まれ」ているだろう。すなわち、英訳で芭蕉その他の俳句を「読む」行為があって、そこから母国語による「詠む」行為へという螺旋的流れが、今日の非・日本語俳句隆盛の一役を担っていると考えてよいのではないだろうか。この推論を実証するかのように、世界の非・日本語俳句詩人たちの中には自らの作品を母国語／英語の二か国語で発表する人も少なくないのである。その実例を次に示しておく。

3. [21世紀：現在の非・日本語俳句の広がり]

上述の歴史的視点の上に立って、現在の非・日本語俳句の広がりがいかなるものなのか、具体的に作品を見ていきたい。シンポジウムにおいては、世界各地（米、西欧、旧東欧、露、中東、アフリカ、南米、アジア）から数十句の実例をスライドで示したが、本論文でそのすべてを同じように引用することは必ずしも有益であるとは思われないため、ここでは代表的な例を10句ほどに絞って示しておきたい[®]。紙幅の都合により、各翻訳作品の行分けはスラッシュ〔／〕を用いて略式とした。和訳はすべて木村聡雄。

我もはや夏の雨には触れざるところ

リー・ガーガ（アメリカ）

(日本式の一行棒書きを試みた例。夏の雨に「触れない」とは、伝統的季感を離れ、新たな俳句を求めようとする意志の表出。)

時あらわる／われ雪片を／追うほどに トニ・ピッチーニ (イタリア)
(次々と生まれるかのように降ってくる雪の様子を、「時あらわる」との屈折表現に込めた。)

わが名を記憶する／唯一の人／わが自画像
マルチェル・ドモンコシ (ハンガリー)
(自分の唯一の理解者が自画像という「他者」にはかならないことへの孤独感、また同時に、自画像は自身の分身であり誇りでもあるかもしれない。)

頁を越えて／言葉から言葉へと／虹 マリウス・ケラル (ルーマニア)
(句集の作品中の短い言葉と言葉が響き合う、その一瞬の輝きを見出した一句。)

古靴に／秋霧が鳴り／祖父がゆく ナダ・ヤメニツア (クロアチア)
(子供時代のヒーローであったろう祖父。英語の“here goes my grandfather”の表現が力強い。)

土の鉢／空洞暗く／涙は食べられない
モルデカイ・ゲルドマン (イスラエル)
(貧しかった幼年時代の記憶か。しかしこれは世界各地の現状でもある。)

蜜柑落ち／誰が今／最初の詩を書く モハメッド・ベニス (モロッコ)
(俳句新興国であろうモロッコ。自らも最初〈の名句〉と記憶されるべき俳句作品を詠もうとする意志。)

子規咳のたび／螺鈿の蝶の／羽ばたきよ
ディエンテ・デ・レオン (コロンビア)
(ノーベル賞作家ガルシア＝マルケスと同胞のこの俳句詩人は、子規の短くも眩い生に対

する敬愛の念を俳句形式に込めた。)

此処こそが／世界の始まり／ゆったり牛車

Y.O. エルデニトグトホ (内モンゴル)

(中国内のモンゴル。どこを見ても地平線ばかりの大草原に立てば、誰もがこの句を実感するのだろう。)

天使／見え隠れ／ひび割れて孵った卵に グエン・ホアンラム (ベトナム)

(新たな生命への賛歌。あるいはこのベトナム俳句詩人は、本当の天使を目にしたか。)

4. A [非・日本語による俳句の定義]

現在の世界の俳句の広がりを示すべく作品例を示したが、これらの作品から導き出せる非・日本語俳句とは、どのようなものが想定されるだろうか。

(1) 形式

日本語とは異なる言語であるため、「5-7-5 定型」(the 5-7-5 fixed-form) は基本的にはなく、代わって「3行自由詩」(three-lined free verse) に置き換えられている。そのバリエーションとしては、17シラブルを用いたものや、三行以外の形式も見かけるが、ごく少数である。

(2) 季語

「歳時記」(a glossary of season words) は、日本の風土・農耕その他の文化的蓄積でもあり、その形式では外国には存在しない。そのため、一句に「季語」(a season word) を詠み込むのではなく、「俳句は自然詩」(nature poetry) と読み換えて理解されることが多い。また、無季句 (non-seasonal haiku) も少なくない。

(3) 技法

「切れ」(Cutting)についても、パネリストのリー・ガーガ氏の説明のように、ある程度意識されている。とはいえ、必ずしも一句の内部に切れが存在しているとは限らないのは、日本語の俳句の場合と同様である。詩における表現や技法は、その言語特性によるところが多いため、非・日本語で俳句を詠むとは言っても、実際には、用いられる言語による詩の影響がかなり大きい可能性が高いだろう。

さて、こうした特徴を持つ非・日本語俳句は俳句なのだろうか。我が国の伝統的な俳句と異なることは明らかであろう。それでは俳句ではないのだろうか。ここで日本の俳句史を振り返ってみれば、例えば自由律という非定型（単律／長律）があり、季語に関しても、この自由律に加えて戦前の新興俳句運動などの無季の流れがあり、表現手法では戦後の社会性俳句や前衛俳句（金子兜太、高柳重信ほか）もある。実際のところ、日本においてさえ、俳句の完全な定義は難しいと言うべきであろう。俳句とは何かという問いの答えは結局、我々ではなく時代が決めることであるように思われる。そして将来的には、地球規模の俳句の定義が必要となる時が来るかもしれない²⁾。

4. B [世界から見た俳句の魅力]

最後に、シンポジウムで司会の深沢氏によって喚起された問題に言及しておきたい。すなわち、世界中の人々が俳句を「詠む」状況下で、「芭蕉や日本の古典俳句の魅力」は何であろうか。換言すれば、彼らは「俳句のどこに惹かれて」俳句を「詠もう」とするのだろうか。

古典俳句に共通する魅力、それは根源的には、前に触れた19世紀末からのジャポニズムや東洋趣味などに係わるように思われる。それ以上に、私が決定的な要因と感じるのは、世界の人々は俳句形式に普遍的な詩精神を感じ取っているのではないか、という点である。今日では世界の多くの詩人や愛好家たちが、

俳句を単に「読む」だけの対岸の文芸としてではなく、自ら「詠む」という営為に身を置くべき普遍性が感じられる詩形式として捉えていると言って過言ではないだろう。

筆者の考えでは、芭蕉は20世紀後半以降、世界的な文学的アイコンのひとりであると思われる。これに匹敵する古典作家といえば、ホメーロスやシェークスピアあたりかもしれない。芭蕉の場合も作品そのものが素晴らしく、また俳論も今日でも魅力的であることは言うまでもないだろう。それ以上に、芭蕉人氣が古代ギリシャや英国の巨人たちに勝っていると思われるのは、私のこの発言に関してガーガ氏が補足的に指摘してくれた通り、その人物逸話（事実や誇張、作り話も含めて）の豊富さの点であろう。他の作家たちの伝記が「歴史的事実」に終始する傾向にあるのに対し、芭蕉の場合は、弟子たちとのやり取りや旅の先々での話、さらには怪しげな隠密説など、日本人のみならず世界の人々の心をも惹きつけるような興味深い逸話が多く存在する。それも芭蕉とその俳句の人氣ゆえのことに他ならないだろう。

5. 〔まとめとして〕

本論では、この100余年の非・日本語による俳句の生成から、「読む」とことと「詠む」ことが漸進的螺旋状に発展してきた流れについて考察した。さらに、今日の非・日本語による俳句の広がりとその特質を検証した。世界は俳句という詩形式に普遍的な魅力を感じ、また自ら「詠む」ことによって自らの詩形式のひとつとして俳句に関わろうとしていると言えるだろう。

【注】

- ①ヘルマン・ファン・ロンパイ氏は2008年からベルギー首相、その後2009年からはEU 初代大統領を2期5年務めた。
- ②「ファン・ロンパイ EU 大統領俳句講演」進行：木村聡雄。『2014欧州と日本の俳句』（ブリュッセル）国際俳句交流協会主催。
- ③「欧州・日本俳句交流の夕べ」（東京）進行：木村聡雄、国際俳句交流協会主催。
- ④ファン・ロンパイ氏による日本滞在中の3句については、筆者が公式に和訳を担当し、各メディアで

もその和訳が用いられた。3句は以下の通り。

山々の森明暗に俳句満つ

ヘルマン (木村聡雄訳)

(On the green mountains / the woods in light and shadow. / Fertile haiku ground.)

Herman

年ごとに誠もて花出会いけり

ヘルマン (同上)

(As each year flowers / are on their rendez vous / More faithful than men.)

Herman

詩人らは生と自然を ― 和の願い

ヘルマン (同上)

(All over the world / Poets sing life and nature. / Sharing makes peace.)

Herman

- ⑤非・日本語による「俳句」の日本における表記は、「ハイク」や「Haiku」が圧倒的に多く、漢字の「俳句」はわずかに見かける程度である。その状況を認識したうえで、筆者としては、世界の俳句詩人たちの「俳句という形式に抱きたい」という精神を尊重すべく、本論ではあえて漢字で「非・日本語 (による) 俳句」と表記しようと思う。

- ⑥19世紀末、たとえば、バジル・ホール・チェンバレインや W. G. アストン、小泉八雲 (ラフカディオ・ハーン) らが、俳諧の発句について記した。

- ⑦W. G. Aston, *A History of Japanese Literature* (William Heinemann, 1898).

- ⑧Aston, p. 289, l. 8. 本書の古典俳句に関して、深沢真二氏から貴重なご教示をいただいたことをここに記しておきたい。

- ⑨Of Miidera / the gate I would knock at- / The moon of to-day

Bashō

(English translation: W.G. Aston), Aston, p. 295.

- ⑩群衆に顔の出現 / 濡れた黒き枝に花卉

パウンド (和訳: 木村聡雄)

"In a Station of the Metro"

The apparition of these faces in the crowd; / Petals on a wet, black bough.

Ezra Pound (1913).

- ⑪パウンドの後にも、フランス人クーシュ (Paul-Louis Couchoud) など、20世紀初頭に仲間たちと俳句を詠んだフランス人などがいたが、今回のテーマである俳句の広がり結びついたとは言い難いだろう。

- ⑫R. H. Blyth, *Haiku*, Vol. 1 (Hokuseido, 1949).

- ⑬The autumn full moon: / All night long / I paced round the lake.

Bashō

(English translation: R. H. Blyth), Blyth, p. 294.

- ⑭Blyth, p. 5, l. 26.

- ⑮俳句と禅に関しては、例えば尾崎放哉や種田山頭火、あるいは戦後の永田耕衣ほかのいくつかの作品に見られるように、個々の俳句では禅の志向を指摘できるだろうが、ブライスは俳句という詩形そのものが禅を表すと言っているのである。

- ⑯例えば日本への仏教や禅の導入、あるいは近代以降の新たな日本の自由詩 (現代詩) の生成など、文化・文芸の導入に際しては、海の向こうの原型と異なるものが生み出され、さらなる発展を遂げてきた変容の歴史を我々自身が知っている。

- ⑰And the quiet cat / sitting by the post / Perceived the moon

Jack Kerouac, *Book of Haikus* (Penguin Poets, 2003), p. 31.

- ⑱Haiku Society of America は1968年、ニューヨークにて設立、現在の会員数はおよそ1000名弱。筆者も2013年9月シカゴ近郊での大会で講演したことがあり、また会誌『フロッグポンド』には、英文の拙論「俳句新時代」、Toshio Kimura, "A New Era for Haiku," *Frogpond* 37: 1 (HSA, 2014) が掲載された。

- ⑲シンポジウムのスライドで示した通り、原作品は各国言語数十種によるが、ここでは原語分析が目的ではないので、便宜上各作者による英語または仏語のみを記しておく。本文同様、各作品の行分けはスラッシュ [/] を用いて略式とした。出典は作者名の後ろに記号で示した。(A) 『(多言語俳句ア

ンソロジー) 水の星』木村聡雄編 (北溟社、2011) ; (B) 『世界俳句11』 (七月堂、2015) ; (C) 『世界俳句10』 (七月堂、2014)。

places i no longer touch summer rain Lee Gurga (A)

Time appears / while I' m following /a snowflake Toni Piccini (B)

The only person / who will remember my name / is my self-portrait Marcell Domonkos (B)

over pages / from a phrase to another / the rainbow Marius Chelaru (B)

inside the old boots / autumnal mist gurgling / here goes my grandfather Nada Jačmenica (C)

A clay bowl / The void inside is dark / Tears are no food Mordechai Geldman (B)

An orange falls and rolls on the ground / now who writes / his first poem?

Mohammed Bennis (C)

Shiki à chaque toux / la papillon de nacre / ouvre et ferme ses ailes Diente de León (B)

This is / the origin of the world / an oxcart, slowly Yo. Erdenetogtokh (C)

An angel / appears and disappears / inside the cracked hatched egg Nguyễn Hoàng Lâm (B)

②⑩司会の深沢氏が指摘したように、例えばカラー柔道着の着用は日本の伝統からは外れることであった。とはいえ、ルールが違っても柔道であることに変わりないのではないかという意見など、今回のテーマは世界基準にまつわる問いへと連なっていくであろう。